

freeeの佐々木大輔社長とともに探る成功事務所のビジョン クラウドサービス活用で顧客サポートを充実させる 九段会計事務所の経営戦略

税理士法人九段会計事務所 代表税理士 高木功治
経営支援チーム IT支援リーダー 猪俣優佳
経営支援チーム 生産性向上リーダー 田中祐基

税理士法人九段会計事務所（東京都千代田区）は、2003年に設立された会計事務所である。代表の高木功治氏（写真左から2人目）は、個人事務所ではなく、いきなり税理士法人の形態で独立した。前例の少ないこの選択は会計業界では異色ともいえるが、高木氏は従来の慣習にとらわれず、変化を恐れない運営を行っていることで知られている。そのひとつがクラウド会計の積極的な推進だ。同事務所は、クラウド会計ソフト「freee」の認定パートナーとして、年間100件というペースで同ソフトの顧問先への導入を進めている。事務所内のみならず、顧問先へも積極的にクラウド会計を導入する意図はどこにあるのだろうか。今回の取材では、freee株式会社の佐々木大輔社長（同右から2人目）を交え、税理士法人九段会計事務所の代表である高木氏、経営支援チームの猪俣優佳氏（同左）、田中祐基氏（同右）に、クラウド会計ソフトを活用した成長戦略についてお話を伺った。





■佐々木 大輔 (ささき・だいすけ)

freee 株式会社 代表取締役社長。1979年生まれ。東京都出身。一橋大学商学部卒。大学在学中よりインターネットリサーチ会社で活動。大学卒業後は、株式会社博報堂へ入社。その後、未公開株式投資ファームでの投資アナリストを経験し、株式会社 ALBERT の執行役員に就任。2008年、グーグル株式会社に参画。日本、アジア、太平洋地域での中小企業向けマーケティングを統括。2012年7月、CFO 株式会社 (現 freee) を設立。2013年より現職。2014年、『日経ビジネス』より「2014年日本の主役 100人」に選出。

会計事務所の運営に クレドがもたらすメリット

—— 税理士法人九段会計事務所は、事務所内のみならず、顧問先へもクラウド会計ソフト Ticee の導入を積極的に推進していることで広く知られています。

本日は freee 株式会社の佐々木社長とともに、九段会計事務所の代表社員である高木先生、現場で Ticee を活用する猪俣さんと田中さんに同

事務所内でクラウド会計を推進する理由についてお話を伺いたいと思います。まずは、九段会計事務所の沿革をご紹介します。

高木 私は法政大学の出身なのですが、2003年にゼミの後輩とともに事務所を開設しました。それが税理士法人九段会計事務所で、いきなり税理士法人からスタートした次第です。

—— 税理士法人の形態を選んだのは理由があるのでしょうか。

高木 特に深い考えはなかったのですが、

けです。ただクレドに落とし込む際には私が主導したわけではなく、皆で意見を出し合って作り上げていきました。

現在でも週に一度の頻度で、クレドのなかからテーマを決めてそのテーマに応じた話をしたり、スタッフで理念を唱和したりしています。

—— 具体的にどのような理念があるのかご紹介いただけますか。

高木 「経営支援でお客様の夢をサポートし日本を笑顔に！」というミッションを掲げています。

私たちは社会の役に立つ組織になりたいと常に話しています。そのミッションを実現するために、どのように行動するのかをクレドの各項目に明示しました。

—— クレドは採用面にも影響がありますか。

高木 採用においてもクレドはよい影響があると感じています。

クレドを見て私たちの理念に共感できない方は、入社してもらってもどうしてもミスマッチになってしまいます。それはお互いに不幸です。

すが、初めから税理士法人を設立しても問題ないとのことでしたので、後輩と「じゃあ税理士法人でやってみるか」と決めました。麹町支部では初めてのケースだったようです。

場所を九段に選んだのは、私が埼玉県、後輩が川崎市だったので、その中間辺りで探したからです。

—— 現在、組織としてはどのくらいの規模なのでしょうか。

高木 東京オフィスが18名、後輩が担当している川崎オフィスが5名で、全体としては20人強の体制です。

クレドはひとつのフィルターのような役割を果たしています。

上場企業も含めた 導入実績は80万オーバー

—— 続いて、freeeの佐々木代表に近況をお聞きします。

佐々木 最近組織的にも大きく拡大しています。300名を超える体制になっています。先日社員全員で合宿を行ったのですが、この規模になると合宿ひとつでも大変です。

—— ある程度の規模になると、会計事務所の運営にも理念やビジョンが求められると思いますが、高木先生はどのようにお考えでしょうか。

高木 私も自事務所の運営には理念が必須だと感じます。この業界には「一匹狼の集まり」のような事務所も多いです。私も人数が増えていくなかでその壁には本当に苦労しました。

そこで、私たちは3年ほど前にクレドを導入しました。私が日頃から口にしていた言葉を見える化したわ

ね(笑)。

現在は自分たちのカルチャーはどうあるべきなのかを議論して、そのような合宿も含めた組織を強くする取り組みに注力しています。

また、会社としても5周年という

ひとつの節目を迎えまして、大阪、名古屋、福岡に支社を展開しています。特に大阪支社は今後もどんどん規模を拡大していきたいですね。

—— 利用者数はどのくらいになったのですか。

佐々木 登録事業者数では80万を突



■高木 功治 (たかぎ・こうじ)

税理士法人九段会計事務所 代表社員。税理士。宅地建物取引士。1970年生まれ。埼玉県出身。法政大学経営学部卒業。都内会計事務所での勤務を経て、2003年に税理士法人九段会計事務所を設立、代表社員に就任。

「な」と感じていました。Freeeさんのお話を聞いた際には「これは楽だ！」と腑に落ちる感覚を持ったことを覚えていています。

そこから高木に持つて帰って、Freeeの営業さんにあらためてお話を伺って導入を決定しました。

—— 導入を決めたのはいつのお話でしょうか。

猪俣 2016年の夏で、ちょうど1年ほど利用しています。

—— 実際に業務で利用するにあたり、事務所の内部ではどのような取り組みをされましたか。

田中 先ほど猪俣からお伝えしたとおり、まず高木と共有しました。そして、高木に「事務所としてFreeeを使っていく」と旗振り役になってもらい、社内への浸透を進めました。この1年間は事務所の職員全員がFreeeを理解して、きちんと使えるところまで必ず持つていくと明確にしたのです。

具体的な操作スキルに関しては、まず元SEの猪俣と私が中心になって理解を進め、それを職員にフィードバックするような形で広めていき

税理士法人九段会計事務所 (http://www.kudan-tax.jp/)

税理士法人
九段会計事務所
〒100-0074 東京都千代田区九段南4-1 九段ビル
info@kudan-tax.jp 営業時間 9:00-18:00

03-3222-5271

九段会計の業務内容 BUSINESS CONTENTS

- 会社設立・税理士変更 | 会社設立はこちら | 税理士変更はこちら
- 相続税 | 相続はこちら
- 経営支援業務 | 経営支援はこちら
- 税務調査 | 税務調査はこちら
- その他の業務 | その他の業務はこちら

Welcome 九段会計! 九段会計の魅力を動画でご紹介!

経営者様のベストパートナーに!

九段会計のクレド Credo

経営者から何でも話してもらえると、私たちが経営者から何でも話してもらえると、私たちが

ました。とにかくその繰り返しです。

—— 大きな変化の導入は、時には職員からの抵抗もあると思います。苦勞された点はありませんか。

高木 仰るとおりで、一般的な会計事務所では変化を嫌うところも多いものです。今までもどりの法則でそのまま維持したいのです。

私たちはFreeeの導入は最優先事項として体制を整えていきました。

猪俣 私たちは4月決算なので5月から新しい期が始まります。Freeeの導入を検討し始めたのは7月だったので、新しい期の予算なども決まっていたのです。

私も別のプロジェクトの予算を持つていたのですが、高木から「もう気にしないでよいかから、Freeeを優先してくれ」と整理してもらったの

です。

高木 ただ、私たちにも壁が全くなかったわけではありません。私たちの組織としては30歳から35歳くらいまでの「先輩チーム」と、30歳以下の「若手チーム」にボリュームがあります。

「先輩チーム」は経験と知識がありますから、今までもどりでも業務

破しました。クラウド会計ソフトではトップシェアを維持できています。製品としては、もちろんこれまでのように小規模法人での記帳代行や経理代行のツールとしても引き続きご利用いただけていますが、それにとどまらない幅が生まれています。

実は今年にはエンタープライズ向けのプロダクトの提供をスタートしました。これにより、数百名規模の企業、上場準備をしている企業などでの導入が進んでいます。上場企業でも既に数件の実績ができています。

エンタープライズ版は内部統制や監査にも対応しているのですが、業務効率化のコンサルティングツール、数字に基づいて経営面での議論ができるツールとしても活用されています。

—— 単なる記帳代行だけではないソリューションとして認識されているわけですね。

佐々木 また、法人税申告機能を本格的にリリースしています。主に会計事務所の皆様を対象とした「申告Freee」というプロダクトの機能の

ひとつです。

利用実績もどんどん増えていきますので、今後も会計事務所の皆様が申告まで自動でできるよう、さまざまな機能を強化していきたいと考えています。

事務所内Freeeを浸透させたのは

—— 本日は実際に現場でFreeeを活用されている九段会計事務所の猪俣さん、田中さんにもご同席いただきました。

私はそもそも事務所の経理を担当していたのですが、請求書にはエクセルを使うし、会計処理にもエクセルを使うし、その一方で会計ソフトも別にあたりますので「面倒だ



猪俣優佳氏



田中祐厚氏



す。そこでは「若手チーム」はなかなか追いつけないわけです。

経理担当不在の危機を乗り越える

しかし、「若手チーム」にも「先輩チーム」と同じタイミングでスタートできるのであれば、頑張ったぶんは「先輩チーム」より評価されるチャンスなわけです。ですから、「若手チーム」のほうがモチベーションは高かったように思いますし、

実際「若手チーム」が中心となって、事務所内やお客様に浸透させるように取り組んでいたと思います。

——環境を整える以外に実施した取り組みを具体的に紹介いただけますか。

田中 私たちの事務所では分業で業務を遂行しています。先日は、入力を担当するアシスタントのスタッフ向けに、Treeeの基本的な使い方に関する勉強会を実施しました。

また、Treeeに触れる機会が多い先輩スタッフに、デモアカウンツを活用して「このような試算表を作ってください」という課題を出したりもしています。こういったテストのようなものも実施して、事務所内の習熟度を一定水準まで高めて

ずとその数字を最後まで流す。だから間違ってもミスもなくなる」という開発理念です。この事例はまさにそのケースです。

現在、特に成長スピードが著しい企業では、売上が優先となっていて内部の経理体制が追いついていないケースが多くあります。先の例のように経理担当者がいなくなっても、中小企業ですぐに人材を確保することも難しいわけです。では、ERP（統合型基幹業務パッケージ）を入れればよいかといえば、そのためにもシステムが分かって、社内の業務フローに精通している職員が必要

なわけです。中小企業には残念ながらそのような人材は多くはいません。ですから、TreeeをERPのような位置づけで導入することを、特に急成長中の企業には強くお勧めしたいですね。私たちのお客様にとっても、Treeeというソフト自体にとっても価値があると感じています。

私が業界に入ったときには既に、「記帳代行は将来なくなる」といわれていましたが、その言葉にはあまりリアリティーは感じられませんでした。ところが、銀行のデータやクレジットカードのデータを自動で取り込み、自動で仕訳をする技術が出てきて、ようやく「本当にあと何年間て記帳代行はなくなる」と感じただけです。ですから、まずは早急に事務所としてTreeeを取り込まなければならぬと感じました。

「会計事務所の仕事はなくなる」といわれていますが、技術でなくなる

ちだけでは100件という目標は現実的ではなかったと思います。

——具体的にお客様にはどのように導入しているのか、事例をご紹介ください。

田中 人材派遣業と広告業を扱うお客様の事例があります。その企業の売上は7億円程度で、従業員は60名ほどの規模です。

ある日、その顧問先の経理担当者が突然退職してしまいました。その担当者にしか分からないことも多く、それまでの経理実務はブラックボックス化してしまっていました。そして、その顧問先の経営者の方から「経理担当者を新たに採用するのがよいのか、それとも他にうまく経理が回る仕組みがないものか」と相談をいただいたのです。

——その相談にはどのように対応されたのですか。

田中 まず、猪俣と私の2人で現在の経理に関する業務フローを全て洗い出しました。どこに無駄があつて、今は何が問題なのかを指摘したうえでTreeeを提案したのです。

——Treeeを導入することで、そ

の顧問先にはどのようなメリットがあつたのでしょうか。

田中 その顧問先では営業の方がエタセルを使って各自で請求書を作成していたので、請求書のフォーマットが全てバラバラでした。さらに、それを基に1枚の台帳に書きで写して管理していました。アナログなやり方ですから、転記の際にミスが発生したり、そもそも転記を忘れてしまつたり、金額が誤つていたりといった問題が当然発生していたわけです。

Treeeの導入後は、そのような煩わしさから一切解放されたそうです。Treeeを使って、同じひとつの数字を活用できる環境になったことが一番の改善点であり、メリットですね。1年規模のプロジェクトになり、現在、経理の専任者は置かなくなっているのですが、主に担当されている方からは「今Treeeがなくなるとは考えられない」といった声もいただいています。

高木 私がTreeeの方に初めてお話を伺った際によく覚えていたのが「二度入力したあとは人の手を介さ

Treeeの導入で

付加価値業務に注力

佐々木 もし、Treeeが会計事務所に影響を与えているとすれば、それはどのようなものだとお感じですか。

高木 私はTreeeさんが登場する以前から、自計化をほとんど進めたかつたのです。入力業務は好きではありませんでしたし、そのために勉強したわけではないという思いがありました。

私が業界に入ったときには既に、「記帳代行は将来なくなる」といわれていましたが、その言葉にはあまりリアリティーは感じられませんでした。ところが、銀行のデータやクレジットカードのデータを自動で取り込み、自動で仕訳をする技術が出てきて、ようやく「本当にあと何年間て記帳代行はなくなる」と感じただけです。ですから、まずは早急に事務所としてTreeeを取り込まなければならぬと感じました。

「会計事務所の仕事はなくなる」といわれていますが、技術でなくなる



は手間がかからないような状況を築いたうえで、MAS監査などの業務をメインにしていきたいと考えています。

労働集約型の入力業務はどれだけ時間を割いても、売上の限界を迎えます。しかし、スキルが高ければ高めるだけお客様に高い付加価値を提供できるような仕事に取り組んでいきたいのです。そのような仕事ができれば、お客様も私たちも幸せになれると思います。

私は、一緒に働いてくれている職員が絶対に幸せでなければならぬと強く思っています。もちろん、それはお客様や協力会社さんと同じです。それが将来的には地域社会、日本、世界の幸せにつながっていくべきよいですね。ただし、私は経営者としてはまだまだですから、まずは自分の身の回りの仲間が幸せな人生を送れる事務所をつくっていききたいですね。

把握を行い、重複しているところや不足しているところを洗い出して、効率的な業務フローを図に起こすのです。そして、それをfreeeに乗せる、freeeに乗せられるような業務フロー図を作って、効率化の支援をしています。

—— それでは今後はMAS監査などの業務に注力されていくのでしょうか。

高木 そうですね。freeeなどをベースに据え、これまでの入力業務に

提供していきたいのです。ですから、freeeを導入することで、ようやくMAS監査と呼ばれる領域に注力できるベースができてきたと感じています。

—— 既にMAS監査の領域での取り組みもあるのでしょうか。

高木 例えば、業務フローの構築を提供し始めています。お客様の全ての部署にヒアリングして現状

効率化支援から

付加価値業務支援へ

—— 最後に高木先生と佐々木社長に、今後の展望を伺います。

高木 まず、組織としては30人、50人とステップを踏んで拡大したいと考えています。ただ、もちろん誰でもよいからとむやみに採用して拡大したいというわけではありません。クレドに共感してカルチャーにマッチする人を着実に増やしていきたいと思っています。

そして繰り返しになりますが、こうした目標を掲げている以上は、freeeさんをはじめとしたクラウドやAIなどのテクノロジーを当たり前前に使いこなしていきたいと考えています。そのうえで、私たち一人ひとりの能力を高め、事務所として付加価値の高い業務を提供できる組織を目指していきたいと思っています。

佐々木 九段会計事務所さんの事例のように、顧問先の業務フローを作り直すためにfreeeを活用いただければ本場にうれしいですね。

これまで私たちは業務の効率化に注力してきました。経理の自動化や税務申告など、この領域は引き続き掘り下げていきます。

また直近では、これまで「給与計算freee」として提供していたクラウドにさまざまな機能の追加を行い、この7月に「人事労務freee」として機能を追加しました。人事関連の業務をワンストップで解決できるソリューションに育てていきたいと思っています。

さらに、今後はダイレクトに付加価値を提供するお手伝いにも取り組んでいきたいと考えています。さまざまなデータを可視化したり、顧問先の企業に気付きを与えられたりするような支援を実現したいと思っています。

—— 本日は貴重なお話をありがとうございました。皆様のおすすめの発展を祈念しています。

—— 猪俣さん、田中さんはどのようにお考えでしょうか。

猪俣 「税理士はいらなくなる」とあちこちでいわれていますので、私はとても危機感を抱いています。正直なところfreeeの出現にも危機感を感じていました。

でも、実際にfreeeを使ってみて、私にとっての危機と捉えるのではなく、うまく共存していけばよいのだなと感じました。つまり、高木が申し上げたように、freeeを活用した業務をベースにして、プラスアルファの業務をもつと行えるようになりたいというのが今後の展望です。

田中 「作業」と呼ばれるような業務、例えば、合わない預金残高の照合などには私たちが労力をかけたくありません。もちろん必要な業務ではありますが、それらをAIを活用したfreeeのような会計インフラに任せてしまえば、その先の仕事に取り組みたいのです。

ですから、私自身は経営者の方に付加価値を提供できるようにもつと、もつと勉強していかなければならな

いという危機感を持っています。

—— 実際にfreeeを使うなかで、何か要望はありますか。

田中 私は現金があることで生まれる問題はとも多いと考えています。ヒューマンエラーも手元の現金のところで起こることが多いです。不正の多くも現金を扱うことで発生しています。

現在、日本でもようやくキャッシュレス社会が到来する潮流を感じています。freeeさんにはその流れをさらに推進する役割を期待しています。

佐々木 今までの社会ではクレジットカードで決済すると、経理処理が煩雑になってしまうという課題がありました。その影響で特にBtoBの現場では現金精算がスタンダードでした。

しかし、現在は自動的にクレジットカードカードの履歴を仕訳できる仕組みができています。クレジットカードを使うことで経理が合理化されるメリットがあるわけです。私たちはそのメリットをもつと強く訴え続けていきたいと考えています。